福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

エジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP)研修1バッチ目での学びを跡付け、省察する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: エルディーン, モスタファ・ヤスミーン・サーミー・ガマル メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10861

エジプト・日本教育パートナーシップ（EJEP）研修1 バッチ目での学びを跡付け、省察する

モスタファ・ヤスミーン・サーミー・ガマール・エルディーン

Ⅰ. はじめに

世界の教育改革の動きに則り、エジプトは教育を改善することを目指し、2008 年以降様々なプロジェクトを開始した[1]。その内、エジプトの若者の能力強化を目的とした教育に関する共同パートナーシップ「エジプト・日本教育パートナーシップ（EJEP）」が 2016 年に締結された。このプロジェクトを通じ、エジプトに日本式教育を導入することを目指し、2019 年度から 2021 年度までの 4 年間で、日本はエジプトから 680 名もの教職員を研修員として受け入れることになった。また、日本で学んだことをエジプトに取り入れることを実現できるよう、エジプトの大統領が 2017 年に「エジプト日本型学校」（以下、EJS）を 21 県に 35 校設立した[2]。日本、とりわけ福井大学大学院連合教職開発研究科で研修を受ける研修員は主に EJS に勤務している教職員である。

2019 年 1 月 31 日から 2 月 25 日の間、福井大学大学院連合教職開発研究科は EJEP の 1 バッチ目を迎えた。研修員は 4 週間にかけ、講義や学校訪問、クロスセッション、振り返りのセッション、ラウンドテーブルを通して日本の最新の学習方法について触れ、学ぶことができた。

筆者は、2018 年 9 月に福井大学大学院連合教職開発研究科に着任し、この研修を担当する教員の一人となった。筆者は、エジプト出身であり、日本語・アラビア語の両言語が話せるということもあるため、資料の翻訳をはじめ、一部の講義の通訳や研修員とのやりとりなど、様々な作業に務めた。本稿では、この研修が始まる前の事前準備の段階から 4 週間の研修での学びや振り返りを経て、この研修を通じ実現可能となったこと、躓いたことを跡付け、次のバッチに向け、どのような準備が必要か、どこを改善した方がよいかについての示唆を得る。

Ⅱ. 受け入れ大学側の様々な事前準備や工夫

1. お弁当及び礼拝室の用意

研修に来日する予定の研修員のほぼ全員がイスラム教徒であったため、研修が支障なく円滑に進むよう、イスラム教の文化や毎日の生活における規則を考慮する必要があった。イスラム教では、1 日 5 回礼拝するという決まりがあり、研修のために大学にいる時間帯で少なくとも 2 回の礼拝が当たるため、連合教職大学院の教職員は、研修員が礼拝をできるよう、研修が行われる建物に礼拝できる部屋を準備してくれた。筆者と相談した上で、この部屋を必要最低限整備し、結果としては研修員が問題や文句を言うことなく礼拝することができた。更に、金曜日の集合礼拝も大事であるため、研修と礼拝が重ならないよう時間に配慮しながら、研修の計画が立てられた。

研修は主に福井大学の文京キャンパス及び附属義務教育学校の 2 箇所で行われた。文京キャンパスでは、研修期間の間、礼拝室が常に確保できていたが、附属義務教育学校での場合は、必要に応じ用意していただいた。

また、イスラム教徒は宗教上で食事の制限があるため、何でも食べられるわけではない[3]。筆者も含め、日本在住のイスラム教徒は材料をチェックした上で食べることを毎日工夫しているが、研修員の場合は、それは容易なことではない。言語という大きな壁があるので、それをどう乗り越えられるかという課題について教職員一同が考えた。

せめて研修時間に絡むお昼のお弁当を用意すると良いとの発想があり、1名の教授が協力してくれそうな業者を探した。業者側もこのような食事の制限を扱うことが初めてだったため、戸惑いながら、筆者に材料について色々と交渉し、他の教授とやりとりをし、検討した結果、食事の制限に対応したメニューを考え、お弁当を作ってくれる段階に至った。これ自体が大きな動きであると思った。業者が使っている材料にのみ拘らず、他の人のために材料を合わせられるという思いやりが心強く感じた。また、食事との関連で、連合教職大学院でも、配慮した軽食を用意していただいた。

大学側から礼拝室及び食事、つまり生活にかかわる問題に関し、このように丁寧に目を向けていただいたことは、大学がこのプロジェクトを成功させるために研修員が最小限の困難さで生活できるよう、最大限工夫したものだと言える。

2．研修で使う資料の翻訳及び通訳者の準備とそれに伴うトラブル発生

1）資料のアラビア語への翻訳

研修を実施するにあたり、教員養成や教員研修に欠かせない資料をアラビア語に翻訳することが必須であった。中でも、本や実践記録、連合教職大学院のコンセプト、研修のスケジュールなど大量の資料が次々と現れた。一人では間に合わないと心配し、この研修に通訳兼コーディナータとして関わったもう一人のエジプト人と分担しながら、翻訳を進めた。しかし、進めれば進めるほど、終わりが見えず、研修が始まる前までは間に合わなかった。仕方なく、研修が進む中、苦労しながら時間を作り残された翻訳作業を続けた。しかし、研修が進むのと平行しながら資料を翻訳すると、時間が限られていることもあり、焦りながら十分検討できず仕上げざるを得ない時もあった。更に、在日本エジプト大使館にも翻訳作業の協力をお願いしたが、翻訳者は教育分野の専門家ではなかったため、専門用語に引っかかった。その結果、やや分かりにくいアラビア語の文章になる部分があった。確かに、翻訳作業を始めた時期が遅すぎたと自覚し、同じ問題に二度と陥らないよう、次回の研修に向け、余裕を持って早めに準備に取り組まなければならないと反省した。

2）通訳者側の誤解とそれに伴うトラブル発生

EJEPの契約上、研修を実施するにあたり、筆者以外にも、アラビア語通訳に携わる通訳者を準備することがエジプト大使館の責務であった。そのため、エジプト大使館がエジプトにあるアインシャムス大学とカイロ大学に通訳の協力を得たい旨を打診した結果、アインシャムス大学に勤めている講師や助手8名が選ばれた。筆者は、8名のリーダーを務めている通訳者と連絡を取るようエジプトの文化参事官に頼まれたが、残念ながら、事が思う通りうまく進まなかった。通訳者が選ばれてから来日するまでの期間はそれほど長くもなく、契約上の通訳者の業務内容も不明であったため、メールでのやりとりの際に大きな誤解を招いた。通訳者が不安を持ち、どのような仕事に関わるかに関して的確な説明を得ていなかったため、結果としては、研修開始日の2日前に8名全員が辞退するという連絡があった。この知らせを受け、福井大学のメンバーは困惑した。二日後に来日する予定の研修員の言語サポートを務める通訳者がいなければ、研修自体が進まないと失敗の恐怖が高まった。しかし、次の日に事態が大きく転換した。エジプト大使館は、日本在住のエジプト人留学生に声をかけ、奇跡的に短時間で6名を確保することができた。福井大学のメンバーがこの6名に初めて会ったのは、研修の開始日であった。両者が不安を抱いたまま、当時連合教職大学院の副研究科長（現在、研究科長）である柳澤教授から、研修の概略及び通訳者としての役割分担を受けた。様々な困難があった中で、連合教職大学院の教員の協働的な取り組みやエジプト大使館の迅速な対応のおかげで乗り越えられ、エジプトの教員研修を目指したEJEPの1バッチ目の研修を無事に開始する段階に至った。

これを受け、次のバッチに向け、早い段階で通訳者を確保してもらい、通訳者には業務内容をあらかじめ明確に説明し、通訳者との連絡方法を改善するよう心掛ける必要があると分かった。

Ⅲ．1バッチ目の来日及び研修開始（東京にて）

学校教育における実践的な学びや協働探究に初めて出会う

1）東京での開講式並びに協働探究のための自己紹介セッション（三つの種）

1月30日に「マネジメントコース」21名、「特活関連活動コース」21名から成る1バッチ目の研修員が成田空港に到着した。早速31日に東京で研修の始まりとなる開講式が開かれ、福井大学連合教職大学院の教員に加え、エジプト大使館や文化局、JICAの方々がエジプトの研修員

を歓迎した。その後、42 名の研修員がグループ別に分かれ、それぞれが自己紹介や、来日する前に準備した三つの種（①これまで取り組んできたこと、②今取り組んでいること、③これからの展望）について話し合った。日本に到着して間も無くということもあり、研修員に疲れもあり、最初の 1 日目はこれに止まった。

2）板橋区立金沢小学校・伊那市伊那小学校の訪問と第一印象

a. 金沢小学校

次の日、2 月 1 日に板橋区立金沢小学校を訪問した。研修員は、校長をはじめ学校の教職員と子どもたちに温かく歓迎された。その後、研修員がグループに分かれ、学校の組織や学校の紹介、当日の見学の流れについて説明を伺った。更に、学校を案内してもらい、掲示されている子どもたちの作品や育てている植物に触れることができた。また、たまたま当日は、学校の全児童のマラソン大会に向けた練習の時間があり、研修員が校長や教員の許可を得て、実際に子どもたちと走り、マラソンに参加した。研修員は初めての学校訪問ということもあり、初めて日本人の子どもと触れ合い、日本の学校のイベントにも参加できたため、驚きと同時に深く感動していた。研修員は子どもたちの熱意、大会の運営、学校の組織化に非常に注目していた。

その後、様々な教室や教科の授業を参観し、教師と子どもたちの関わり方や、授業での子どもたちの積極的な取り組み、授業に対する熱意に触れることができた。給食や掃除の時間も参観でき、エジプトの EJS に導入しつつある特活の一部を肉眼で確認でき、とても意義のある訪問であった。

b. 伊那小学校

金沢小学校の訪問を終え、研修員はバスで長野県伊那市に移動した。次の日に伊那小学校を訪問した。その日は、伊那小学校にとって公開学習指導研究会40回目を迎える日であった。それは大きなイベントであり、子どもたちのみならず、保護者や、日本全国の教員達、地域社会がともに参加するものであった。「自分の問いをもって追求し、学びを深めていく」というテーマで、子どもたちの主体的な学びと友達との協働的な関わりを通して自分の持っている問いを探っていく力を創造することが目指されていた。

参加者が多かったにも関わらず、学校はこのイベントを非常によく組織した。伊那小学校でもエジプトの研修員がグループ別に分かれ、一日の流れを説明する資料をもらった。伊那小学校も金沢小学校と同じく、子どもたちの作品で学校を飾っている。更に、魚や羊なども飼っている。

伊那小学校でも、子どもたちの授業での学びの様子を参観することができた。ここで注目したのは、教師の役割である。教師は授業を占有することなく、授業のファシリテーターとなり、子どもたちが自分自身で課題を見つけ、問いを立て、主体的に解決を探っていく中で学びを深めることを支えている。必要に応じて間に入り、子どもたちに助言をしたり、サポートしたりする。

様々な授業を参観した後、学校の教師たちは体育館に集合し、クラスのプロジェクトや作品を紹介する集会を見ることができた。この集会では、教師同士が情報を共有したり、子どもの主体的な学びの成果を紹介したりすることを通じ、実践の中でどのようなチャレンジがあり、それを乗り越えるためにどのような取り組みに挑んだかということについて発表する。

エジプトの研修員にとっては、金沢小学校と伊那小学校のいずれの訪問も非常に素晴らしい経験であった。子どもたちが主体的に学んでいる姿を見ることができたこと、子どもたちが疑問を持っていることに対し自分自身で答えを見出す力を養うために使われる最新の教育方法がどのように適応されているかを見学することができたこと、更に、エジプトで話題となっている「特活」に実際に触れ確認できたことが非常に良い機会であったと言える。

Ⅳ. 福井での研修の開始

1．「省察」とは？

長野県での学校訪問を終え、2 月 4 日から福井大学での研修のサイクルが始まった。最初に簡単な開講式が行われ、その後、研修員がグループに分かれ、金沢小学校、伊那小学校での参観を通じ学んだことについて、初めての省察的なコミュニケーションセッションに挑んだ。初めての省察的なコミュニケーションということもあり、まず「省察」とは何？という大きな疑問が不安とともに上がった。実際に聞いたこともなく、やったこともない営みに対して、どうすればいいか、どのような内容の話をすればいいか、楽しかったところを語ればいいか、何を中心に、何を念頭に入れて話せばいいか、等々の疑問が上がった。福井大学側は、初めての省察的なセッションだからこそ、

まず印象に残ったところ、素晴らしいところ、びっくりしたところについての話を整理し、グループのメンバーと共有して話し合うことを大事にしながら、それが省察的なコミュニケーションの経験になればよいと考えた。皆それぞれが自分なりの意見や印象を持っているが、このような場で意見を共有することは初めてで、良い出発点だったと言える。

研修が進むにつれ、研修員はクロスセッションや振り返りのセッションに慣れてきて、ただ良かったところ、見たことについて話し合うのみならず、見学から学んだこと、自分の学校に取り入れることが可能な活動、その活動を実行する時の注意点等という深い点についてまで話すことができ、研修を通じ学びが深まった印象を教員は受けた。

2．福井市内の様々な学校訪問とそれに伴うトラブル発生

福井大学教育学部附属義務教育学校訪問

a. 実習的な学び

この研修では、ただ研修員に講義をするという一方的な方法のみならず、色々な学校や授業を見学しながら、自分で新しい知識や学びを身につけるために、学校訪問を通しての実習的な学びも重視されていた。そのため、福井大学教育学部附属義務教育学校（以下、附属）をはじめ、和田小学校、宝永小学校など、福井市内の様々な学校を訪問した。

附属では、授業以外にも、1 年生から 6 年生までの子どもたちがともに関わる縦割り活動を見学した。6 年生が先輩として責任を持って活動に取り組んだり、小さい子どもたちに助言をしたり、手助けをしたりするのに対し、小さい子どもたちが先輩を尊敬し、先輩の助言を受けて積極的に活動に取り組むという責任感に満ち、尊敬に満ちた相互的な活動に注目した。更に、今年度の 1 年生が来年度 1 年生になる幼稚園の子どもたちに歓迎会を開く活動も見学した。研修員は、可愛い子どもたちが積極的に活動に参加している姿に感動した。

それに加え、エジプトで話題になっている日本の学校における給食の準備や掃除も実際に見ることができ、感動した。研修員に学校の生活を深く理解してもらえるよう、筆者は研修員にくっつき、子どもたちの細かな行動をアラビア語で説明した。更に、連合教職大学院の教員が追加してくださった解説もアラビア語で説明すると、「なるほど！」、「素晴らしい！」、「へえ、子どもってそこまでできるの？」、「先生も掃除に関わるの？」などのコメントや相づちが絶えず現れた。

b. 理論的な学びとトラブル発生

① 翻訳資料の欠如と附属での出来事

研修が始まる前、エジプト側からも日本側からも様々な事情があり、それにより準備が遅れた部分があった。上述したように、この遅れが翻訳の準備に影響を与えた。附属では、授業参観に加え、前期課程・後期課程の校長、副校長、教頭等に学校の組織や方針、仕組みについて説明をいただいた。パワーポイントを使って説明された方もいれば、要覧やリーフレットを手に持って、文字に沿って説明された方もいた。しかし、どちらの資料においてもアラビア語の翻訳が欠いた。

筆者は、他の通訳者と分担しながら、附属の教職員の日本語での話を同時通訳で、アラビア語で説明することに取り組んでいたが、やはり物足りなかった。研修員は、資料なしで我々通訳者の説明を聞き、メモを取ったり、その場で情報を処理したりと吸収しようとしてくれていたが、参考資料のない新しい情報ばかりが耳に入ってきたので、これ以上苛立ちを隠すことができなかった。「その情報は何の役にも立たない！」、「それは時間の無駄だ！」、「なんでしっかりと事前準備してないの？」、「資料を配られても、日本語だから無意味だ！」等々の文句が次々に現れた。あまりにも落胆していたため、附属のスタッフの存在を気にせず、筆者の方にどんどんアラビア語で硬い言葉を投げた。この状況のままでは続けられないと心配し、連合教職大学院の教員に相談した。教員は研修員の怒りを慰め、率直に翻訳における欠如について説明し、残りの短期間の間、仕上がりそうな資料をアラビア語に翻訳する努力をすると約束した。

更に、研修員の怒りを収めるよう、柳澤教授が研修のサイクルの進め方や毎週の終わりに期待される振り返りの成果について改めて説明され、焦らないよう研修員に助言をした。

② 資料を読みたくない

EJEP を通じ実行されるこの研修は、「研究」ではなく「研修」という解釈で、理論的な学びよりも、教師の実践的な学びを養成するために必要な学校訪問や模擬授業を中心にやりたいとの希望があった。しかし、いくら学校を訪問しても、エジプトの教育制度に新しく導入される概念としての主体的な学び（Agency）や協働探究、実践コミュニティ（Communities of Practice）の基盤やあり方、そし

てそれらを実際に取り入れている学校の実践記録を読まなければ、今まで見てきた授業での学びから外側の殻しか伝わらない。研修員が母国に帰り、福井大学での学びを生かして協働探究を推進する持続的な学びのサイクルを構築し、教師の学びや養成を支える実践コミュニティを組織するにあたり、実践コミュニティの運営とあり方及び実践コミュニティを通じ教師の知識や学びを持続的に養成するために必要な環境づくり、また生徒の主体的・長期にわたる協働探究のあり方・進め方について学ぶ必要がある。しかし、理論的な資料を読むことに慣れていない研修員には、いきなり読んでもらうことは現実から離れた期待であった。したがって、研修後宿泊先のホテルで読んだり、エジプトへの帰国後読み続けたりできるよう、スタッフが研修員の都合に合わせスケジュールを緩めたりした。

Ⅴ. 今回の省察、次回に向けて

今回の研修は 1 バッチ目ということもあり、研修員はアラビア語母語話者ということもあったため、躓くことが多くあった。両国のギリギリまでのやりとりにより、準備段階が遅れ、その結果研修開始までに翻訳が間に合わない資料もあれば、できていても用語が分かりにくいものもあった。それは確かに、研修の円滑な実施に悪影響を与えることが分かった。更に、準備段階の際に発生した通訳者とのトラブルが福井大学の教員に大きな不安を抱かせ、研修の成功が疑われる時もあった。次回に向けて、同じトラブルが発生しないよう、事前にエジプト大使館に通訳者を確保することをお願いし、混乱が発生しないよう通訳者との全てのやりとりを、エジプト大使館を通じて行うこととした。

研修が終わった後、研修は研修員により評価された。一般的には「良かった！」、「役に立った！」、「研修を通して、特活についてよく分かった！」、「日本の学校を実際に見学できて、とても勉強になった！」、「子どもたちの学んでいる姿を実際に見られて感動した！」、「子どもたちの意見や発意が尊重されていることに感動した！」、「学びの環境がふさわしい！」、「社会地域との連携がすごい。エジプトにもできるといい！」等々の意見や評価が記載されていた。一方で、「学校訪問がもっとあれば良かった」、「一つの学級にくっついてその学級の一日の流れと学校生活を見たかった」、「資料を読む時間が長くて、つまらなかった」、「振り返りやクロスセッションなどの話し合いの時に、日本人の意見や経験をもっと聞きたい」、「翻訳資料が分かりにくかった」、「講義の場合は、通訳だけでは足りず、アラビア語に翻訳された資料もほしい」等々の意見もあった。

上記の意見や評価を踏まえ、6 月に予定されている次回の研修の状況を改善できるよう、教員一同取り組んでいる。通訳者を事前に確保したほか、筆者は、エジプト大使館が組んでいる翻訳チームと翻訳資料を分担しながら、早い段階から翻訳作業に取り組むよう工夫する。そして、研修員の要望に応え、学校訪問を増やすよう、教員たちは様々な学校に声をかけお願いをする。

前回の研修の流れと研修の前と研修中に発生した様々な問題を振り返り、そこで足りなかったものを付け足し、更に研修員の評価を生かし、研修の改善に向けた取り組みに挑むという試みは、研修の成功につながるだろう。全ての要望に一気に答えられるわけではないが、試行錯誤を繰り返しながら、失敗した点、成功した点を振り返ると深い学びにつながるのではないかと期待できる。

［注］

1) 2008年に大統領決定129号により、「職能開発教員アカデミー」が設立された。このアカデミーは国内外の教師教育の拠点となる法人機関である。更に、2016年に「教員が第一」プログラムが教育省の指導のもと立ち上げられた。本プログラムは、従来の知識詰め込み型の教育から学習者主体の教育への転換を目指している。

2) 文部科学省によると、2019年度に開校されるEJSの学校数は40である。

3) イスラム教の法則では、豚肉の他に、イスラム教の法則に従って処理されていない牛肉や鶏肉、ヤギ肉など、そしてそれら由来の油やエキス、アルコール類の全て、そしてアルコールを含む全ての調味料や食材を食べてはいけないという決まりがある。

［参考文献］

1)エジプト大使館　文化・教育・化学局
https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000136266.pdf

2) EJSの公式ウェブサイト
https://ejs4students.moe.gov.eg/programs/